

I 研究テーマ

『アクティブ・ラーニングを取り入れた思考力・判断力を高める指導の工夫を行い、生徒の学力向上をさらに図り自尊感情を高める』

II 本研究に取り組んだ理由

本校では平成26年度・27年度の2年間、西東京市立学校教育研究奨励事業研究指定校として「交流活動を通して、自尊感情を高める指導の工夫」について研究を行ってきた。

一般的に、自尊感情が高い生徒は、積極的に物事に取り組み、さまざまな体験を積んでいく中で、心が安定し失敗から立ち直るレジリエンスが強められ学力も伸長すると言われている。本校の生徒は平成25年度全国学力・学習状況調査によると学習面では東京都や全国の平均よりも高い生徒が多かったが、自尊感情はそれらの平均と比べて著しく低い数値であった。

本校では生徒の自尊感情が低いことへの対応と授業改善への新たな取り組みが不可欠であった。よって生徒どうしのアクティブな交流により自尊感情を高めることを研究の主題におき授業や学校行事等において実践をしてきた。この目的を達成するためにアクティブ・ラーニングの一形態であるファシリテーションプログラムの一部を用い生徒相互による話し合い活動である交流活動を行うことを依拠として実践をしてきた。

本年度は研究テーマを「アクティブ・ラーニングを取り入れた思考力・判断力を高める指導の工夫を行い生徒の学力向上をさらに図り自尊感情を高める」と設定し、アクティブ・ラーニングを構成する「主体的な学び」「対話的な学び」そして「深い学び」について一層理解を深め、これらの視点を取り入れ、授業改善に取り組むことにした。

III 仮説

アクティブ・ラーニングとは「見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動につなげる主体的な学び」、「生徒通しの協働、教員との対話などを手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める対話的学び」、習得した概念や考え方を活用した見方・考え方を働かせながら問いを見出して解決したり、自分の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう深い学び」の実現を目指すものである。つまり自分を深く見つめ、教え合い学び合う交流活動を行うことで深い学びを実現することができ、学力が向上し、他人から認められることで自尊感情が向上する。つまり自尊感情を高めるにはアクティブ・ラーニングを通して教科の力を養うことが基本となる。

IV 取り組み

1 校内研修会

(1) 第1回研修会 「アクティブ・ラーニング概論」

主催 校内研究推進委員会

①次期学指導要領で育成したい資質・能力

ア 「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」

各教科等に関する個別の知識や技能などであり、身体的技能や表現芸術のための技能等も含む。(～中略～)社会の様々な場面で活用できる知識・技能として体系化しながら身につけていくことが重要である。

イ 「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」

主体的・協働的に問題を発見し解決していくために必要な思考力・判断力・表現力等である。特に問題発見・解決のプロセスの中で以下のような思考・判断・表現を行うことができることが重要である。

(i)問題発見・解決に必要な情報を収集・蓄積するとともに、既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に組み合わせて、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考。

(ii)必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し結論を決定していくために必要な判断や意思決定。

(iii)伝える相手や状況に応じた表現

ウ 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」

上記①、②の資質・能力をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であり以下のような情意や態度等に関わるものが含まれる。

(i)学びに向かう力や自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。

(ii)多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性に関するもの。

②アクティブ・ラーニングとは

～「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」～

Key Words

ア 深い学び

習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置きつつ深い学びの過程が実現できているかどうか。

学習のプロセス

新しい知識や技能の習得→知識や技能の活用→問題解決にむけた探究

ポイント

- (i) 「個別の知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力、人間性」の力が総合的に発揮される場面を設定すること。
- (ii) 教える場面と、生徒に思考・判断・表現させる場면을効果的に設計し関連させること。

イ 対話的な学び

他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。

ポイント

- (i) 身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには多様な表現を通じて、教師と生徒や、生徒同士が対話し、それによって思考を広げる深めることが必要である。

ウ 主体的な学び

子どもたちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうかが大切である。

※主体的な子どもの姿とは

- 子どもが興味を持って積極的に取り組む姿。
- 学習活動を自ら振り返って意味づけようとする姿。

ポイント

- 子どもの学びに向かう力を刺激するために、
 - 実社会や実生活にかかわる主題に関する学習を積極的に取り入れる。
 - 体験活動の充実を図り、その成果を振り返って次の学びにつなげる。

「アクティブ・ラーニング」に関する授業チェックシート（例）

- ・目標を理解し、課題に興味を持つことができていたか。
- ・学習の見通しをもつことができていたか。
- ・根拠に基づく自分の考えや課題解決に必要な情報を整理することができていたか。
- ・自分の考えを「書く」「読む」「発表する」「話し合う」などの言語活動に積極的に取り組むことができていたか。
- ・自分の考えをもちながらグループ活動やペア活動などに取り組むことができていたか。
- ・学習の振り返りでは「分かった」「できた」など成果や課題について自覚したことを、自分の言葉で書くことができていたか。
- ・日常生活・社会生活での実践や次の学びに意欲をもつことができていたか。

参考文献

- 「アクティブ・ラーニング実践の手引き」 田中博之 教育開発研究所
- 「論点整理」 中央教育審議会教育課程企画部会
- 「アクティブ・ラーニング」 岡山県総合教育センター
- 「これからの時代に求められる資質・能力の育成」 東京都多摩教育事務所

（２）第２回研修会 「主体的・対話的で深い学び」をどう実現するか

～授業改善の質的向上を図るための課題と対策を考える～

講師：産業能率大学教授 小林 昭文 先生

①アクティブ・ラーニングの新しい定義

一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味でのあらゆる能動的学習のこと。能動的な学習には、書く、話す、発表するなどの活動への関与とそこで生じるプロセスの外化を伴う。【出典：「アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂】

ア 主体的な学び・「主体的にやれ！」と脅したら、「先生の顔色を窺うだけ」である。

課題依存型から自己調整型への移行を促進することが大切である。

イ 対話的学び・対話とは一人ではたどり着けないアイデアや結論にたどりつくプロセスをいう。「チームで協力できていますか」「あと10分だけど順調ですか」などと対話を促進する質問をすることが大切である。

ウ 「深く学べ」と叱ってもできない。課題の設定、対話の促進・深化・「リフレクション

(振り返り)が大事。振り返りが「主体的な学び」も「対話的な学び」も促進する。

リフレクションカードの質問例

- (i) ・態度目標に沿って話し合いができましたか？
 - ・それによって気づいたことや感じたことは何ですか？
 - ・次はどうしようと思いますか？
- (ii) ・内容目標に沿って理解できましたか。
 - ・「わかったこと」「わからなかったこと」は何ですか。
- (iii) ・授業改善のアイデアや授業についての感想・リクエスト・苦情等なんでもよいので書いてください。

エ 授業での「態度目標」を明確にすることが大切である。態度目標とは「しゃべる」「質問する」「説明する」「動く」「チームで協力する」「チームに貢献する」等の生徒が意欲的に活躍することを目指すものである。

オ 能動的な試み→具体的な体験→内省的な観察→抽象的な概念化のサイクルを繰り返すことが大切である（コルプの経験学習モデル）

V 2学期以降にアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた研究授業を全教職員が行った。以下は研究授業を終えてまとめた成果と課題の抜粋である。

1 成果

- ・課題について自ら考えさせ、適切な解答に近づけるため試行錯誤させることができた。
- ・グループ活動を通して、他者の意見を認めて自分の考えを深めさせることができた。
- ・グループの考えを発表し合うことで、自分たちと違う思考をとらえさせることができた。
- ・各自の予想をもとに班で協力し実験をして確認し、問題解決を図ることができた。

2 課題

- ・各グループの意見発表の後、結論を急ぎすぎた。フィードバックして他者の意見を検討し合う時間がとれればさらに思考が深まったと思う。
- ・ほぼすべての班で同様の結論に達してしまっただけのため、話し合い活動や発表を通じて多様な考え方を知り、個々の考えを広げ深めることが十分行われなかったと推測される。さまざまな考え方のできる課題を設定し、話し合い活動や発表を通じて多様な考え方を知り、考えを広げ深めるようにしていく。
- ・中には各自の考えをもち班で話し合うことができない生徒もいるように思われる。生

徒間の差を埋めていきながら有意義な活動につなげていく方策が必要である。

- ・ 今後ペア学習の中で、楽器の練習についてのチェックリストを載せたワークシートを活用するなど活動を通して生徒が何を学んだかを振り返ることができるように、視覚的にわかるように指導をより工夫する必要性を感じた。

VI 成果と課題

(1) 成果

- ・ アクティブ・ラーニングの概要について理解を深めることができた。
- ・ アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善や生徒の学びの在り方を想定した授業改善について学ぶことができた。
- ・ 全教職員がアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた研究授業を展開することで授業内で自尊感情を高める取り組みを増やすことができた。

(2) 課題

- ・ 自分の考えをもってグループでの話し合いをすることが難しい生徒がいた。多くの生徒が見通し（結果・方法・考え方）を持って対話的な学びができるようにさせた。
- ・ 時間の配分、主体的な学び・対話的な学び・深い学びの内容などアクティブ・ラーニングの視点をまだうまく取り入れることができていない。より生徒の実態にあった取り組みを研究していかななくてはならない。